

# 勸工場と明治文化（2）

鈴木 英雄

## 目 次

- (1) I はじめに
- II 明治政府の政策
- III 博覧会の語源
- IV 万国博覧会
- V 内国勸業博覧会
- VI 東京府勸工場の誕生と歴史
- VII 民営勸工場
- VIII 勸工場の経営特色
- IX 資料間の不一致
- (2) X 勸工場と明治文化
- XI おわりに
- 参考文献

## X 勸工場と明治文化

明治、大正、昭和に書かれた小説、短歌、随筆などに「勸工場」がどう表現されているかをみると明治文化に大きな影響を与えたことが理解されよう。

- ① 夏目漱石（1867－1916 東大・一高講師、朝日新聞記者、小説家）

### ○ 中年サラリーマンのうさばらしの場<sup>1)</sup>

「宗助の淋しみは単なる散歩か観工場縦覧位なところで、次の日曜まではどうかこうか慰藉されるのである。」（15ページ）

「門」の主人公「野中宗助」は京都帝大在学中に友人安井の妻「御米」と不倫の恋で結ばれ、京大を中退し丸の内の下級サラリーマンとして早稲田の崖下の借家生活をしている。

宗助の日曜日は勸工場縦覧（自由に見ること）により慰められている。

### ○ 若者のデートの場所<sup>2)</sup>

『「実は父が……」と小夜子は漸との思で口を切った。

「はあ、何か御用ですか」

「色々買物がしたいんですが……」

「なるほど」

「もし御閑ならば、小野さんに一所に行って頂て勸工場でも買って来いと申しましたから」

「はあ、そうですか。そりゃ、残念な事で、丁度今から急いで出なければならぬ所があるもんですからね。ーじゃ、こうしましょう。品物の名を聞いて置いて、私が帰りに買って晩に持って行きましょう」

「それでは、お気の毒で……」

1) 「門」 岩波文庫

2) 「虞美人草」 岩波文庫

「何構いません」

父の好意は再び水泡に帰した。小夜子は悄然として帰る。小野さんは、脱いだ帽子を頭へ載せて手早く表へ出る。』(194-195ページ)

漢学者井上孤堂の娘小夜子と小野清三は結婚を約束していた。小野は孤児で井上孤堂に面倒をみてもらい大学を卒業し銀時計<sup>3)</sup>を受領し博士論文を書いている。小野は甲野藤尾と親しくなり結婚しようと思うようになる。小夜子は小野に勧工場でデートしようと話しかけるが振られてしまった。当時は勧工場が若者のデートの場であったことがわかる。

なお漱石は藤尾を「あれは嫌な女だ。あいつを仕舞に殺すのが一篇の主意である。」<sup>4)</sup>と書いている。

○ 人妻への恋の悩みから旅行しようとして  
勧工場で買物を<sup>5)</sup>

「代助は嫂の肉薄を恐れた。また三千代の引力を恐れた。……代助は蒼白く見える自分の脳髓を、ミルクセークの如く廻転させるために、しばらく旅行しようと決心した。……代助は旅行案内を買って来て、自分の行くべき先を調べてみた。が、自分の行くべき先は天下中どこにもないような気がした。しかし、無理にもどこかへ行こうとした。それには、支度を調べるに若くはないと極めた。代助は電車に乗って、銀座まで来た。朗かに風の往来を渡る午後であった。新橋の勧工場を一回りして、広い通りをぶらぶらと京橋の方へ下った。」(177-188ページ)

「それから」の主人公長井代助は大学卒業後就職せず父の経済的援助で一戸をかまえ、書生、下女をおき、所謂、高等遊民として生きて、父のすすめる縁談を断り独身である。代助は友人平岡の妻三千代に恋している。

『平岡、僕は君より前から三千代さんを愛していたのだよ』

「ではいう。三千代さんをくれないか」と思いきった調子に出た。

「漱石は代助のこの論理と情緒とを、平岡の葉書を受け取った代助が独りアルバムの中の三千代の写真に見入るところから始めて、二人が雨の日に百合の花に包まれて至福感と罪責感とを同時に味わうクライマックスまで様々な交感の場面として書き込んでいる。」(326-327ページ)

○ マーケット・リサーチの標識<sup>6)</sup>

「主人は往来をあるくたびごとにあばた面を勘定してあるくそうだ。きよう何人あばたに出合って、その主は男か女か、その場所は小川町の勧工場であるか、上野の公園であるか、ことごとく彼の日記につけ込んである。彼はあばたに関する知識においては決してだれにも譲るまいと確信している。」(94ページ) 主人の日記にあばたの人に出会った記事をつけているが、その会った場所は一つに勧工場がある。現在なら渋谷のハチ公前とか、有楽町のマリオンの前ということであろう。

○ 倫敦は世界の勧工場<sup>7)</sup>

「当地では万事鷹揚に平気にしているのが紳士の資格の一つとなっている。むやみに巾着切りのようにこせこせしたり物珍しそうにじろじろ人の顔などを見るのは下品となっている。殊に婦人などは後ろを振りかえってみるのも品が悪いとなっている。指で人をさすなんかは失礼の骨頂だ。習慣がこうであるのにさすがに倫敦は世界の勧工場だから余り珍しそうに外国人を玩弄しない。」(281-282ページ)

3) 参考文献 「東京大学百年史」東京大学出版会  
鈴木英雄「夏目漱石と経済」近代文芸社

4) 「夏目漱石全集」第23巻 岩波書店 84ページ

5) 「それから」岩波文庫

6) 「我輩は猫である」 岩波文庫

7) 「倫敦消息」 「漱石文明論集」 岩波文庫

漱石留学中（1900－1903年）のロンドンでは世界の文化が集まっていたことがうかがわれる。

ここでは勸工場は小売業の店舗ではなく抽象化された概念としてとりあげられているのである。

○ 勸工場閉店、あとに活動写真館ができる。  
産業の盛衰をえがく<sup>8)</sup>

「やあ何時の間にか勸工場が活動に変化しているね。些とも知らなかった。何時変わったんだろう」

「どうも驚くね世の中の早く変わるには。そう思うと己なども何時死ぬか分からない」  
(300ページ)

明治四十年代は百貨店が勸工場の経営をのりこえて勸工場は続々と閉店していった。そのあとに活動写真館（無声映画）が新設されていく様子が記されている。現在、映画館、銀行、証券会社の支店が閉店となり、跡地にコンビニエンス・ストアとか外食チェーン店が開店することに似た現象といえよう。

主人公の二郎と兄の一郎との対話が記入されている。「人間の不安は科学の発展から来る。進んで止まることを知らない科学は、かつて我々に止まる事を許してくれた事がない。徒歩から俵、俵から馬車、馬車から汽車から自動車、それから航空船、それから飛行機とどこまで行っても休ましてくれない。どこまで伴れて行かれるか分からない。実に恐ろしい」(354ページ)

繁華街で観客を集めてきた勸工場が百貨店の誕生によって閉店されて跡地に新興産業の活動写真館が進出するケースから始まり、「人間の不安は科学の発展から来る。」として近代文明の問題点を90年前に指摘しているのである。

○ 浮世の勸工場<sup>9)</sup>

「ことに西洋の詩になると、人事が根本になるからいわゆる詩歌の純粹なるものもこの境を解説する事を知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を弁じている。いくら詩的になっても地面の上を駆けあわて、錢の勘定を忘れるひまがない。シェレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない」  
(14ページ)

ここでは勸工場は実際に商店で販売しているものを取扱うということではなく、同情、愛、正義、自由を売るといように抽象化されている。勸工場が多数の品揃えを行なっているたえとしてとりあげているのである。

② 永井荷風（1879～1959 慶大教授、小説家）

荷風は広津柳波に弟子入り、巖谷小波の木曜会に入会、外国文学に興味をもち始め、そのなかでエミール・ゾラに遭遇した。

1903年（明治36年）渡米し、フランス語などを学び、ついで1905年、父の命で横浜正金銀行（戦後、東京銀行、現東京三菱銀行）ニューヨーク出張店に入行、1907年にはフランスのリヨン支店に転勤したが、銀行員として苦痛を感じて辞職し1908年7月に帰国した。

アメリカ、フランス在留中の経験から「あめりか物語」「ふらんす物語」を刊行した。「その記念碑的作品であるばかりでなく荷風文学における個性確立の象徴として重要な意義をもつ。」<sup>10)</sup>とされる。

○ 勸工場跡に新業態の小売業を計画<sup>11)</sup>

「野心」は明治35年刊で柳浪門時代の作品

9)「草枕」 岩波文庫

10) 笹淵友一 『永井荷風……「墜落」の美学者……』  
明治書院 380ページ

8)「行人」 岩波文庫

と区別すべき本格的出版であるといわれている。

笹島光太郎は日本橋の間屋「田島屋」(小間物化粧品などを取扱う)の若旦那で、旧来の商店の経営方式からデパートメント方式に転換しようとして銀座の「南龍館」という勧工場跡を改造して新規開店する計画を進めた。明治35年と言えば、勧工場が最盛期でまだ「百貨店」誕生前である。現代のベンチャー・ビジネスとも言うべき構想である。店員佐吉は光太郎の妹を慕って解雇され、これをうらみとして新店舗に放火してこの小説は終る。『時代の転換期に当って、商法を一転し、ことにデパートメントストア風の様式に切りかえて成功を目論むという構想は、当時の社会の現象であったろうが、また第二帝政下のフランスの現象として、ゾラがAu bonheur des Dames (荷風はこの題名を「勧工場」と訳している)やPot-Bouille等に好んで描いたところで、荷風は必ずやこれにヒントを得たに相違ない。それが放火によって灰燼に帰する結末は、またゾラのLa conquete de Plassantによったのかと思う。』<sup>12)</sup>

ここでゾラのAu bonheur de Damesについてみよう。

「貴女楽苑」(河内清「世界文学大系41 ゾラ」 筑摩書房)

「(女性の幸福)百貨店」(尾崎和郎「若きジャーナリスト エミール・ゾラ」

「貴女の樂園」(三上於菟吉訳 天佑社 大正11年刊)

三上訳では「羅紗屋の店には何物でも売ってる! どうしてそれを直ちに勧工場と叫ばないのだ?」(34ページ)「而して彼は快活に、彼の片田舎で巴里子の勧工場に反感を抱いて、引き込んでゐる老父の怒りを話した。」(435ページ)

「時として彼女は全く活気付いて、非常に大きな理想的勧工場、近世商業の協同團體を獻策した其處では……」(503ページ)など「勧工場」という訳語がと大正11年にも使用されているのである。

○ 荷風は百貨店Departmentstoreを勧工場と翻訳<sup>13)</sup>

「ずっと見渡す上手は高いタイムス社アストルホテルを始め、下手はオペラハウスから遠くメーシーやサックスなど云う勧工場のあるヘラルド廣小路まで、連る建物は雪の衣を着て影の如く朦朧として暗い空にその頂きを埋め盡し、唯窓口の灯のみが高く低く螢か星のやうだ。」(100-101ページ)

「紐育へ来てから久しく三十三丁目の<sup>デパートメント</sup>勧工場<sup>ストア</sup>で賣子をして居たんですがね。一週間に僅少五弗や六弗の給金ぢや、とても遣り切れやしませんわ。……」(105ページ)

「彼は事務を取って居る最中にも五分と其の横顔から目を放す事が出来ない。年は二十六七にもなろう。小肥の身丈は高からず容色も十人並ではあるが、黒い頭髪を真中から割て烏打帽でも冠ったように頭の周囲へ巻き返し、上から下まで出来合いの勧工場もので小奇麗に粧った姿は品格の無い處が、乃ち重なる魔力となって、往来なぞで一寸摺違った男の目にも長く記憶されると云ふ其の模型の一例である。澤崎は何かにつけて話をしかけ、早く懇意に打解けて見やうと勤めたが、女は日本人の會社には初めて奉公、萬事に氣の置ける為めか、一日金米糖を口に頬張り相手構はずに笑って暮す例のオフィースガールには似も寄らず、至って無口で、僅に其の名をミセス・デニングと云ひ、一年ほど前に寡婦になって今は一人下宿住ひをして居るとばかり。折々は何か物思はしく頻杖をして居る事

11)「野心」(「荷風全集」第一巻 中央公論社)

12) 吉田精一 「吉田精一著作集」 第5巻永井荷風 32ページ

13)「あめりか物語」(「荷風全集」第3巻 岩波書店)  
「ふらんす物語」(「荷風全集」第2巻 岩波書店)

さへある。」（105ページ）

「自分が場内に這入った時、正面の舞台には市中の勸工場<sup>マガザン</sup>を初めてとして種々な商店の廣告を書いた布の緞帳が下りて居て、人々の雑談する聲囂然たる中を彼方此方と花賣の姿と駄子や番附を賣る子供の甲走った聲が聞えた。……今宵年の盡る夜、街には燈火も明るく人通りも多いけれども、商店や勸工場に夜中働てる薄給の賣子の様子、賑ふ角々のカフェーに給仕人の忙しさ。電車の行きかふ様を見ると自分は暗い彼の夜に變らぬ悲愁に迫られ、家へ帰ったとて誰一人話相手のない淋しい身上ながら、さりとて例の寄席を覗く気にもならず、何處か面白い處へ行きたい行きたいと思いながら、いつか元と来た道を再び渡るローンの橋。」（447-454ページ）

ところで荷風がDepartment Store を勸工場と翻訳したのはつぎのような経過によるものと思われる。

明治37年12月6日に合名会社三井呉服店は株式会社三越呉服店へ改組し所謂「デパートメント宣言」を行った。翌38年1月3日に全国主要新聞に三越呉服店の1ページ廣告が掲載された。「当店販売の商品は今後一層其種を増加し凡そ呉服裝飾に関する品目は一棟の下にて御用辨相成候様設備致し結局米国に行はるゝデパートメント、ストアの一部を實現可致候事」

荷風が渡米したのは明治36年であり、三越のデパートメント宣言を直接見聞せず米国、フランスのデパートメントを勸工場と翻訳したものと推測される。

なお三越の廣告には「デパートメント、ストア」と書かれており「百貨店」という語はでていない。当時、百貨店という用語はまだ定着していなかったのである。当時の辞書からみても「デパートメントストア」は「百貨商店」「小売大店舗」等と呼ばれていた。

また初田享「百貨店の誕生」（三省堂）によると『デパートメント・ストアの日本語訳』としては百貨店が使われるのが一般的になっ

ているが、百貨店の訳語が当初から一定して使われていたわけではない。横河民輔が三井呉服店の依頼で明治二十九年（一八九六）から翌年にかけて渡米したときに行った、デパートメントストアの調査報告書には、「雑貨陳列販売所」の用語が使われている。明治の末期には「小売大商店」などと訳すことが多かった。昭和の初め頃になっても百貨店の用語に統一されていたわけではなく、「小売大店舗、百貨商店、百貨店の呼称あるも、原語のまゝに適用せられる事が多」かったという。長い時間を経て百貨店の用語を最初に用いたのは、商店経営の研究者であり、また同文館で発行していた『商業界』の主幹でもあった桑谷定逸だったという』（61ページ）としている。

#### ○ 勸工場の屋根裏から銀座界限を鳥瞰する<sup>14)</sup>

「自分は折々天下堂の三階の屋根裏に上って都會の眺望を楽しんだ。山崎洋服店の裁縫師でもなく、天賞堂の店員でもない吾々が、銀座界限の鳥瞰圖を楽まうとすれば、この天下堂の梯子段を上るのが一番輕便な手段である。茲まで高く上って見ると、東京の市街も下に居て見るほどに汚らしくはない。」（97ページ）

京橋協会編「京橋繁昌記」には出雲町に天下堂という勸工場があると記されている。

野口孝一編著「明治の銀座職人話」青蛙房に天下堂という間口六間位、三階建の勸工場とデパートをごっちゃにした商店が記述されている。

また小森孝之編著「ふるさとの思い出 写真集明治大正昭和銀座」図書刊行会 昭和58年に明治末年撮影の「新橋から見た銀座通り」

14)「紅茶の後 銀座」『荷風全集』第13巻 岩波書店

と題した写真がある。

これによると帝国博品館の数軒先に「天下堂」の建物がうつつている。看板に「百貨店」という字が読めるようである。

また松島栄一他編「思い出の写真集 東京昔と今」ベストセラーズ '71年によると「デパートメントストア」という字が、天下堂の看板にみえる。

○ 屋根のない勧工場の廊下<sup>15)</sup>

「銀座駒形人形町通の柳の木かげに夏の花の露店賑ふ有様は、煽風器なくとも天然の涼風自在に吹き通ふ星の下なる一大勧工場にひとしいではないか。」(97ページ)

「両国の廣小路に沿うて石を敷いた小路には小間物袋物屋煎餅屋など種々なる小賣店の賑ふ有様、正しくは屋根のない勧工場の廊下と見られる。」(346ページ)

このように荷風は東京の商店街を「屋根のない勧工場の廊下」と表現している。

③ 坪内逍遙 (1859-1935 小説家)

○ 大学生の部屋に勧工場で購入した衣紋竹がある<sup>16)</sup>

「書箱のほとりに、衣紋竹あり、勧工場で買ひとりたる出来合物とは、見ゆるものから、壁の折針への直接に、衣裳を引かけね用心は、上方出の書生にや、此社會にはいと希なる、注意家とこそ思はれたれ。」(33ページ) 逍遙は明治18年に「当世書生気質」を起稿、当時の大学生生活をえがいているが、そのなかに勧工場が登場する。

④ 巖谷小波 (1870-1933 近代児童文学の開祖と言われる)

○ 新進の作家 勧工場で買物<sup>17)</sup>

「明治20年7月12日 銀座へ行き勧工場ニテ帯止め……」

「同8月31日 勧工場ニテボタン……」

「同12月3日 勧工場にておもちゃ求む……」

「同12月21日 勧工場にて帽子……」

「同12月27日 牛込勧工場ニテ鋸切れ求む」

「同24年2月23日 午後一時出で芝勧工場へ行き 管 人形 等求め二時紅葉館へ行……」

巖谷小波は「こがね丸」などで有名であるが日記を公開している。これによると小波はしばしば勧工場で買物をしていることがわかる。芝の東京勧工場から近くの紅葉館（高級料理店）へ寄り文学者と食事をしたことがうかがえる。

⑤ 徳田秋声 (1871-1943 小説家)

○ 銀座の勧工場の下駄、傘を買う<sup>18)</sup>

「その頃の銀座には勧工場が二つあった。悠々と等は、指を爛らせながら、毎日そのロンシャン・ラムプを取り扱ってゐたが、時にはその勧工場へ入って下駄や傘を買ったりもした」(81ページ)

『紅葉先生と、分淵堂と道頓堀邊を歩いてゐたあの時、勧工場へ入ってぐるぐる歩いてゐるうちに、端なく本屋の前へ出て来ると先生は「ほら」といって、顎をしゃくったので、ふと看ると、そこに暮れに春陽堂から出たばかりの「雲の行方」が出てゐたが、ひどく照臭い感じで其儘顔を背向けた。』(185ページ)

15)「日和下駄 樹路地」「荷風全集」第10巻 岩波書店

16)「当世書生気質」「逍遙選集」別冊第一 第一書房

17)「明治文学全集」20 筑摩書房

18)「光を追って」「秋声全集」第12巻 雪華社

⑥ 内田魯庵（1868－1929 小説家、評論家）

○ 下女が勸工場で五十何銭の指環を買う<sup>19)</sup>

奉公している夫人が下女に自分が持っている指環をくれると言った。

『呀』と夫人がお京の左の薬指を見て、『御上等の指環を穿めてるンだね。』

お京はハッと気が付いて眞赤になっ周章で左の手を隠した。お京の薬指に穿めているのは勸工場で五十何銭奮発して買った貴重なお寶であるからだ。

お京は嬉しさに何事も忘れて禮を繰り返し、此夫人の為めならば一生御奉公しても惜しくないと内心で決めて了った。」（255－256ページ）

下女とは今日では死語になっているが、明治大正時代には女性の住込の職業として一大勢力であった。この下女が勸工場で50銭余の指環を購入していたという大きな特徴であったのがこの時代であった。<sup>20)</sup>

⑦ 高浜虚子（1874－1959 俳人、小説家）

○ 「百八の鐘」 大晦日は朝三時迄営業<sup>21)</sup>

『上野の百八の鐘が鳴る間歩いて来やうと内を出た。……「ア、退屈だ、まだ三四十分も間がある、弱ってしもうナー、勸工場でも一廻りして来やうか。」と其中の一人は出て行った。静かになった為め鐘の音が聞こえる。百八の鐘はまだ鳴ってゐるのだ。時計は一時だ。……勸工場に這入って見た。客はまだぞろぞろと出入りをしてゐる。ある、店の番人はランプの油を見て、「油をつがんならんでしような。今が一時位のものでしような。」

隣の店の番人に話しかけた。「去年はつがなかったが三時にはまだ二時間ありますから今年はつがんならんでしよう。」と隣の店の番人は返辞をした。……』

勸工場が大晦日に午前三時迄営業を行っていたことがえがかれている。現在の大型店は年末には午前七時頃閉店しているのと対照的である。

○ 東明館の裏迄、十銭で<sup>22)</sup>

「一月に内幸町で仕事をして歩いて自宅へ向う途中、和田倉橋を回り会計検査院の角で若い女性、電話交換局の交換手と出会った。一人の持っている傘の柄に「山本みね」と書いた紙片がついていた。「余も殆んど後ろ向いたが、尚ほ其ひまにちらとお峯サンの顔を見ることを得た。果たして美人だ、果たして素敵な美人だ。……」（14ページ）

神田橋近くで風でお峯さんの傘はおちよこになってしまった。

四月末、芝の南佐久間町を出たのが夜十時前だった。車夫が追いかけてきて「旦那まりませウ」と言った。「小川町の東明館の裏迄いくらで行く」ときくと「へー東明館の裏迄旦那十銭やって下サイ」と言ったので車に乗った。

車に一匹の犬が走っている。車夫との話で、妻が去年、娘がこの三月に肺結核で亡くなり、娘は十七歳、美人、電話交換手だったことがわかった。車が小川町へ出た頃、車夫が「みねチャンみねチャン」と犬を呼んだ。「みねチャンといふのは犬の名なのか」と聞くと、みねとは死んだ娘の名で娘が犬を可愛がっていたのでこの犬をみねチャンと呼ぶことがわかった。「余は何とも知れずうら悲しい心地で東明館手前の處へ来た時、余は今迄すっかり忘れて居たことをふと思ひ出した。三月程前の神田見付の出来事を。あの娘、あ

19) 「破垣」内田魯庵全集 10 ゆまに書房

20) 参考文献 鈴木英雄「夏目漱石と経済」近代文芸社

21) 「勸工場」定本高浜虚子全集 第8巻 写生文集 一 毎日新聞社

22) 「丸の内」定本高浜虚子全集 第5巻

の可憐な美人が、たしか山本みねといった。美人、十七歳、交換局、肺病、凡てのことが悉く車夫の話に符号する。……」「余は此夜夢を見た。新たらしい傘を買ってやって老車夫親子のいたく喜んだ夢を。」(28-30ページ)

当時、人力車の行先を言うのに「東明館の裏迄」という呼称であったことがうかがわれる。

# ⑧ 国木田独歩 (1871-1908, 詩人, 小説家)

## ○ 都市郊外住人が日曜日に都心の勧工場へ買物に<sup>23)</sup>

「眞蔵とお清は留守番、老母と細君は禮ちゃんとお徳を連れて下町に買物に出掛けた。

郊外から下町へ出るのは東京へ行くと称して出慣れぬ女連は外出の仕度に一騒するのである。……午後三時過ぎて下町行の一行はぞろぞろ帰宅って来た。……禮ちゃんが新橋の勧工場で大きな人形を強請って困らしたの……」(140-143ページ)

明治三十年代は日本の産業革命が進行し、東京に産業、人口が集中した。また所謂サラリーマン階級が増え、その住宅は郊外に建てられるようになった。日曜日に老母、妻子、下女が下町へ買物に行くという風景がえがかれ、おそらく帝国博品館で娘が人形を買ってとねだる状況などサラリーマン家庭のすがたが勧工場など商店の買物を通して書かれている。

# ⑨ 幸田露伴 (1867-1947 小説家, 随筆家)

## ○ 勧工場で商品を買ってもすみそうもない<sup>24)</sup>

「而も亦或は政子が自から進んで頼朝を譲

り受けたのではあるまいか。それから又頼朝は次女へ付文を爲ながら、見當違ひの長女の政子と契を結んで仕舞って、これは違ったとも云はずに済まして仕舞ったところなどは實に奇を極めて居る。勿論政子は美しくもあり、恰俐でもあり、しっかり者でもあって、そしてその政子が自ら望んで頼朝を買って出たと云ふのならば、男冥利、後へは退けないから頼朝も承知したのであらうが、次女へ文を贈って長女を得て済ますなぞといふのは、勧工場で物を買っても然様は済みさうもない事で、徳用らしいといふので相馬焼の湯呑を買はうとしたのに家へ帰って包紙を開いて見たら京焼の美麗なのだったと云ふやうなもので、差當りの感じの好悪は兎に角に、目的は齟齬した事なのである。それを平氣で一向無頓着で居たところなどは、慥に政子が氣に入っただけには相違無いが抑々又頼朝の超常識なもの甚しいと云ひたい。政子が後年頼朝に一寸の油断もしないで、柱に縛り付けた猿のやうに爲て置きたがる程の氣味の見えるのも、最初に其様いふべきイキサツがあつて出来た中なのであるから無理もないのである。」(650-651ページ)

源頼朝は鎌倉幕府の初代将軍である。伊豆に流されて北条政子と結婚した経過が記述され、勧工場という小売店で何でも気軽に買えるというたとへとして使用されている。

# ⑩ 落合直文 (1861-1903 国文学者, 歌人)

## ○ 文学者がみた勧工場<sup>25)</sup>

「ちかごろ、観工場といふもの、いたるところにたてられたり。……もとより、何を買はむともあらねば、たゞ見るのみ、過ぎゆくに、人々、うちむらがりて、たやすくとほり得べくもあらず。……右に左に、目をそゝぎつつ、なほ、見もて行くに、茶碗、徳利、箸、

23)「竹の木戸」「国木田独歩全集」第4巻 学習研究社

24)「頼朝」「露伴全集」第10巻 岩波書店

25)「萩の会遺稿」 落合直幸 明治37年



膳、碗、楊枝、靴、手ぶくろなどよりはじめて、火鉢もあれば、巨燵もあり、カバンもあれば、シャップもあり。頭にかざすもの、手につくるもの、足にはくもの、腰にまとふもの、すべて、なに一として、備はらざるものなく、まことに、洽集といふ館の名にそむかず。こゝにても、そこにても、人あまたあまりたるが、雑誌手にとり、大かた見終りて、買はずに出でゆくは、江戸っ子にや。手をふれしばかりにて、はやくうりつけられたるは、田舎ものにや。……さて、ここにいはまほしきは、ならべあるものどものことなり。そのもの、うちにて、いかなる物がおほく、また、いかなる物がすくなきか、また、奢侈にかゝはれる物などはすくなきか、はた、おほきか。こまかにこを思はむには、おのづから、世の人々の心のおもむくところも知られむ。ことに、あやしむべきは、勸工場のならひとして、入口のところには、金銀のまき繪、漆器、陶器など、うるはしきものゝみかざりつらねて、出口の方には、帯、播鉢、はた、杓子、大火吹竹など、ならべおくなり、こもまた、よそめをのみ心とする、今の世のさまならむか。」（325－327ページ）

勸工場の商品構成、展示方法、顧客の動向など文学者も商店経営のポイントをよく観察していると言えよう。

#### ⑪ 尾崎紅葉（1867－1903 小説家）

「伽羅枕」「三人妻」などが前期の代表作。「多情多恨」「金色夜叉」などが後期の代表作。

「金色夜叉」は明治30年7月から6年にわたり読売新聞に連載された。

この時代は日本の資本主義経済のなかでも産業革命の勃興期であった。

例えば、産業金融の日本興業銀行は明治33年設立、34年には官営八幡製鉄所（現新日本製鉄）の操業が開始された。日本の粗鋼生産は33年の1千tから34年には9千t、35年には4万7千tに急増加した。

「金色夜叉」はまさにこのような時代背景

のもとに書かれたのであった。

#### ○ 5人の子を珠数繫にして勸工場に入る者<sup>26)</sup>

「時を銭なりとして之を換算せば、一秒を一毛に見積りて、壱人前の睡量凡そ八時間を除きたる一日の正味十六時間は、實に金五圓七拾六錢に相當す。之を三百六十五日の一年に合計すれば、金貳千壱百〇貳圓四拾錢の巨額に上るにあらずや。……

彼の人々の貳千餘圓を失ひて馳違ふ中を、梅提げて通るは誰が子、獬豸擔げて行くは誰が子、妓と車を同うするは誰が子、唧楊枝して好き夜着たるは誰が子。或は二頭立の馬車を驅る者、結納の品を担する者、雑誌など読みもて行く者、五人の子を珠数繫にして勸工場に入る者、彼等は各若干の得たる所有ありて、如此く自ら足れりと爲るにかあらん。此等の少く失へる者は喜び、彼等の多く失へる輩は憂ひ、又希には全く失はざりし人の樂めるも、皆内には齷齪として、盈てるは虧けじ、虧けるは盈たんと、孰か其の求むる所に急ならざるはあらず。」（下巻5－6ページ）

当時の子供の数は5－6人と推計される。なお厚生省「人口動態統計」平成9年によると「合計特殊出生率」は1947年（昭和22年）4.54から1997年（平成9年）には1.39人に低下している。

片岡良一（1897－1957 国文学者）の解説に『「金色夜叉」は、さういふ時代の混乱をその作なりに兎に角割切ってみようとした作品であったのである。……けれどもこの題材は紅葉には矢張り少し荷が勝過ぎた。第一すべての問題である「金」がほんとうに書けてゐなかった。……金を描いて失敗し、金の支配する社會を描かうとして僅かにその表皮を撫廻したにすぎなかったこの作が、あの時代の動揺する空気の中に活動してゐる「女」を描

26) 「金色夜叉」岩波文庫

いた作としては流石に優れたものを示してゐるのが注意されねばならない。……』(3-10ページ)

⑫ 永井龍男 (1904-1990 小説家)

○ 北京の東安市場に東明館を思い出す<sup>27)</sup>

『昭和十X年十月一杯を、私は満州見学に費して、それから北京へ入った。……「ええ二色三色求めましたが、それよりも、あそこで子供時分の事を思い出しました。とても昔の勸工場に似てゐるやうな気がしまして」……

「ほお、勸工場。なるほどなあ」×さんの横顔が一寸微笑んだやうに思われた。……

「君は」と私へ向いて「何處の勸工場を知つてゐる」

「東京の神田で育ちまして、駿河臺下の東明館がすぐ傍でした」

「東明館なら僕も知ってる、学生時代によく行ったものだ」

勸工場という建物は、榮螺の殻に伏せたのを、大きく煉瓦づくりにならしたと云ふのであろうか。

三十年前の私どもの小學読本にも「勸工場」といふ一章があり、臆げな記憶をたどると、現在の百貨店と同様な職能を持ち、その名の通り日常品工業発達の一助をも目的として設置されたといふ意味が、館内を見學して歩いてゐる風な文書の中に、記されてあつたと思ふ。

新橋上野の兩博品館、神田小川町の南明偵樂部、本郷の何と私の知つてゐるものだけでも數へられるし、地方の都會にもあつたものだと聞いてゐるが、此處で大きな榮螺の殻と云ふのは、その頃の電車の車掌が、駿河臺下東明館前」と告知した、その東明館のことだ。…… 勸工場は不思議な建物だ。様々な陳列

品を見乍らくるくる館内を廻つてゐるうちに、またもとの出入り口へきて了ふ。知らぬ間に二階へ上つてゐるという式のものも在つたそうだが、東明館は平建てであつた。煉瓦の門の入口を入ると、館内には何時も電燈がともつて居り、塗物類や化粧品のにほひの一緒になつた、勸工場獨特の、ひんやりとした空氣が我々を裏む。永い間に、自然と人に踏み固められた幅四五尺の土の通路は、風の如く日のお壕の水ほどに、滑らかな不思議なでこぼこを持ち、ゆるやかな角度で絶えず圓をかき乍ら、奥へ奥へと客をいざなふ。通路の両側の壁が陳列棚で、片側には更に四五尺幅の陳列臺が続き、品物の種類がかはる毎に、店番が坐つてゐた。その店番が小椅子を臺にして、背延びして瓦斯のマントルを燃やしてゐたやうな印象が、ふと浮かんで來た處を見ると、館内を照してゐたのは、或ひは電燈ではなかつたかも知れない。ものの十五分もすれば、館内を一周して、もとの入口の處へ出て來たものだろうから、奥深い譯はないのに、かうして追憶してゐると、大きな榮螺の中の渦巻を幾度か幾度か廻つたやうな氣持がする。館内で通路が十の字になつた處もなく、考へれば考へる程不思議な建物になってくる。……

その店番と店番の間を、その人達だけが利用する、木戸附きの細い路の横についた處が幾箇所があつた。お客の通路から横町へ入る勘定になるのだが、いっぺん是非此處が通り抜けて見たくて、思ひ切つてやつたらば、ひよいと出口に近い玩具屋と文房具屋の間に飛び出して、とても新鮮な氣がしたものだ。私共が、この大榮螺を活用しない譯はなかつた。探偵ごっこが一番楽しみは、此處へ逃げ込むことにあつた。……

それ程の東明館であり乍ら、私は遂に此處で買物をしたおぼえがない。』

27)「手袋のかたっぽ」「井伏鱒二・永井龍男集」日本現代文学全集75 講談社 昭和37年 303-308ページ

⑬ 石川啄木（1886－1912 歌人 小説家、  
朝日新聞校正係）

○ 勸工場の品揃へを詠む<sup>28)</sup>

「勸工場目をひく物のかずかずをならべて  
見する故によろこぶ」（141ページ）

○ 勸工場は東京の本郷、盛岡にもある<sup>29)</sup>

盛岡の農家の娘、お定とお八重は理髪師山  
田源助につれられて東京へ行き下女に奉公す  
るという筋書きである。

『お定の胸に刻みつけられた東京は、源助  
の家と、本郷館の前の人波と八百屋の店とへ  
の字口の鼻先が下向いた奥様とである。……  
勸工場は、小さいながらも盛岡にもある。お  
八重は本郷館に入って見ないかと言出したが  
お定は「此次にすべす」と言って渋った。』  
（154－163ページ）

⑭ 北原白秋（1855－1942 詩人 歌人）

○ 勸工場に陳列された商品の匂を感じる<sup>30)</sup>

「新しき匂なによりいとかなし勸工場のぞ  
く五月のころ」（55ページ）

○ 銀座の夏の花壇と勸工場の匂を詠む<sup>31)</sup>

「赤い鼻、小さい花。石竹と釣鐘艸。  
かなしくよるべなき無智……」

瓦斯の点いてる  
午前十時ごろの勸工場のにほいと  
WOOLEN FABRIK. K. KONDO 金字ある  
硝子棚の

薄いセル地の悩ましい気分のそばに、  
こころもち青くさい草花の茎の微動……

「城ヶ島の雨」などで知られる北原白秋は  
銀座、新橋の街を詠み勸工場について「瓦斯  
灯」と新しい商品の匂にふれている。（367ペー  
ジ）

⑮ 木下杢太郎（1885－1945 東大医学部教  
授 歌人）

○ 盲目の葬列<sup>32)</sup>

けたたまし、病む壁の狂へる呼吸に圓蓋も、  
大穹隆も、靴の踵も、舗名も、酒舗の戸も、  
理髪店の欄も古びたる勸工場裏の出口も伴奏  
きぬ、落日の曲の印象（76－77ページ）

⑯ 中野重治（1902－1979 詩人、小説家、  
評論家、参院議員）

○ 西洋の勸工場<sup>33)</sup>

ここは西洋だ  
イヌが英語をつかう

ここは礼儀ただしい西洋だ  
イヌがおれをロシア・オペラに招待する  
ここは西洋だ 西洋の勸工場だ  
キモノとコッターの棚ざらしの日本市場だ

そしてここは監獄だ  
番人が鍵をじゃらつかす  
ここは陰気なしめっぽい監獄だ  
囚人も番人も人と言葉をかわさない……

プロレタリア作家の中野の詩「帝国ホテル」

28) 「啄木全集」第1巻 岩波書店

29) 「天鷲絨」「石川啄木全集」第3巻 筑摩書房

30) 「白秋全集」6 岩波書店

31) 「白秋全集」2 岩波書店

32) 太田正雄「木下杢太郎全集 第一巻」岩波書店  
緑金暮春調

33) 中野重治「中野重治詩集」岩波文庫 帝国ホテル  
－ 82－83ページ

の記載である。高級ホテルを「西洋の勧工場」と表現している。夏目漱石が「倫敦消息」で「倫敦は世界の勧工場」と書いているが、いずれも「勧工場」を小売業としてではなく、各種のものが揃っている縮図であることの比喩に使用されている。

⑪ 寺田寅彦(1878-1935 物理学者、随筆家、東大教授)

○ 夢であったかもしれない<sup>34)</sup>

「百貨店の前身は勧工場である。新橋や上野や芝の勧工場より以前には竜の口の勧工場というのがあって一度ぐらい両親につれられて行ったような范とした記憶があるが、夢であったかもしれない。それはとにかく、その勧工場のもう一つ前の前身としては浅草の仲見世や奥山のようなものがあり、両国の端のたもとがあり、そうして所々縁日の露店があったのだという気がする。」

○ 勧工場で田舎にいる娘への年玉の品を買う<sup>35)</sup>

寅彦の長女貞子は明治34年出生したが、翌35年母夏子が死亡。

「明治39年1月3日 午後井上へ行く。

……帰路勧工場にて貞へ年玉の信玄袋、共益商社にて楽譜都の春等求む」(27ページ)

「明治39年1月21日 神田東明館にて絵葉書の額縁を買って帰る」(31ページ)

○ 勧工場、百貨店と買物してまわる<sup>36)</sup>

「明治41年10月18日……電車にて新橋博品館に行き、東一の靴、帽子アルバム等求む、

帰路松屋にて貞子の浜児帯、靴下など求む。…」(86ページ)

「大正3年10月11日 午前 寛子、貞、弥生と松屋に行き、貞の冬着紋付を注文す、母上帯と合わせて83円65銭なり。其れより銀座に行き天賞堂にて貞の指環を求む。……」(313ページ)

「大正3年12月30日 午後一同打連れて三越に行く書棚(拾壱円)一個、貞子の常衣、手袋、弥生の御手玉などを求め、それより神田に行き弥生の帽子を求む」(320ページ)

寅彦の日記を読むと買物の商店が勧工場から百貨店へ変わっていく状況が明らかである。

○ 銀座アルプス<sup>37)</sup>

新橋詰の<sup>しんばし</sup>勧工場<sup>かんこうば</sup>がその頃もあったらしい。これは云わば細胞組織の百貨店であって、後年のデパートメントストアの<sup>アンチンペーション</sup>予想<sup>エンブリ</sup>であり胚芽のようなものだだったが、結局はやはり小売商の<sup>ほうか</sup>集团的蜂窩<sup>ほうか</sup>あるいは珊瑚礁のようなものであったから、今日のような対小売商の問題は起らなくても済んだであろう。とにかく、これは、田舎者が国への土産物を物色するには最も便利な設備であった。それから考えると、東京市民の全部がことごとく「田舎者」になった今日、デパートの繁昌するのは当然であろう。……」

⑫ 高橋義孝(1913~独文学者、評論家)

○ “明治のスーパー” 勧工場<sup>38)</sup>

『岡本かの子の長編「女体開頭」には、ヒロインの美少女奈々子が「勧工場のどこが、好きなの」ときかれて、こんなふう

34)「寺田寅彦全集」第5巻 岩波書店 104ページ

35) 34) 第19巻

36) 35)

37)「寺田寅彦全集」第3巻 岩波書店 275-276ページ

38)「東京故事物語」河出書房 昭和48年 102-104ページ

に答える一節がある。「あの廊下のところにお店が閉まっていて、人通りがないと、しんとお化がでそうなところ。あすこを帰々通り抜けること、そりや面白いわ」これは「小売店を廊下の両側に並べて、万般のものを売る勸工場は、後の百貨店の商い振りを先駆したもの」と解説している作者自身が、幼女のころの勸工場に対して抱いた印象にちがいない。

勸工場について書かれた文章に幼年期の回想が多いのは、勸工場の構造が子供の目にいかに魅惑的に映ったかを示すものであろう。』

なお高橋氏は永井竜男「手袋のかたっぽ」川上澄生「明治少年懐古」などにふれて“明治のスーパーマーケット”としている。

「このほか、階段なしで階上にあがれる上野広小路の杉山勸工場、新橋際の博品館などが有名で、一時は勸工場時代を現出した」

#### ⑲ 生方敏郎（1882－1969 随筆家、評論家）

##### ○ 明治時代の学生生活で勸工場へ行く<sup>39)</sup>

「勸工場というものが、ちょうど活動写真のように市内の賑やかな町の彼方此方にあった。今新橋際にある博品館などその遺物の一つであるが、上野にもあれば神田にも牛込にもあって、散歩に出た人たちは買物はあっても無くってもそこへ行った。三越や白木がデパートメントストアを始める以前のことであったからかも知れないが、とにかくああいう雑貨店を見ろという欲望は人々の心にあるものと見えて、勸業場は安っぽい品を、一口に勸業物と言われた位粗悪な品物ばかりを並べてあるにも拘らず、日夜多くの客を引付けた。中でも神田の南明館東明館などは最も多く学生に行く勸業場で、五十稲荷の縁日の夜などは肩と肩で押合い、陳列棚を見ながら歩くと足

を踏まれるくらい雑沓した……」

#### ⑳ 川上澄生（1895－1972 画家）

##### ○ 今でも時々夢に見る<sup>40)</sup>

「東明館、南明館、新橋側の博品館、それから芝にも上野廣小路にも九段の下にも勸工場があった。

いろいろ異った店が隣り合って細い路に続いて一階からひとりで二階へ昇り又下に降りて出口になってしまふ。だらだら坂にも店が並んでゐたやうだ。そしてなだらかに凹凸のある三和土のやうになって居る黒い土の路を踏んで勸工場を一巡するようになった居た。どの勸工場も店の配置の順が大體あったらしい。出来合ひの衣服類、筆筭や鏡臺と云うた道具類や盥などは出口に近い方であって何だか淋しい場所だった。今でも時々夢に見る。私達、子供の足を留めさせる所は何と云ってもおもちゃ屋であった。……」

#### ㉑ 安藤更生（1900－1970 美術史家）

##### ○ 明治三十年代の銀座を象徴するものは、服部の時計台と勸工場の博品館である<sup>41)</sup>

「銀座四丁目の朝野新聞がやめると、後へは時計王服部金太郎の店がき来た。屋上に上げた巨大な時計台は場所が場所だけによく目立って充分公告の目的を達した。錦絵にも描かれ、絵葉書にも写されて、地方の人は銀座の図といえ、必ずこの時計台を中心とする景色を見せられたものである。国定教科書の銀座の図にもこの塔が描かれてあった。大正九年に取り壊されるまで永く人々に親しまれた塔だ。銀座のマストだった。

銀座の勸工場

39)「明治大正見聞史」中公文庫 昭和53年 105ページ

40)「川上澄生全集」第3巻中央公論社 昭和53年 114－116ページ

41)「銀座細見」中公文庫 261－264ページ

服部の塔を後檣だとすれば、その前檣にも例うべき時計台が、もう一つ新橋際にあった。それは博品館である。

<sup>まとも</sup>纏ったデパートメント・ストアのなかったころにあっては、勧工場は極めて便利な買物場だった。三越白木がデパート化する以前の東京における勧工場は非常に隆盛だった。どの通りにもほとんどこれのない通りはないといっていらいだった。二葉亭の「平凡」の中に、主人公が田舎から出て来て、知人の家に寄客となるところがある。(省略)

勧工場はこんなにまで都会的で、都会の誇りで、これを知らない者は恥だったのである。

博品館は明治三十年前後に出来たので、三階建てでこれも服部と同じく大きな時計台をあげたが、場所が新橋のトッ付<sup>つき</sup>と来ているので、劣らず目に入った。新橋のステーションを出て上野浅草の方へ向おうとする者には、まずこの塔が眼にはいったのである。

## ② 内田誠 (1893-1955 随筆家)

○ 勧工場の、子供の頃の我々の上に有った魅力は、今日この頃の百貨店の比ではなかった。<sup>42)</sup>

勧工場といふものは、まだまだ多くの人々の記憶に、残ってゐるのに相違ない。新橋ぎはの、現在はカフェになっている處に立ってゐた、博品館の如きものがそれである。ビルデングを入ると、博覧会の陳列場の如く、両側に、各々の商店、さまざまなものを売る店が、肩を押しあってならぶ間にはさまれた、通路が一本、二階から三階へと、上ったり下りたりして、出口まで、いや應なしに、勧工場中を見て廻らなければならないようになってゐた。

勧工場の、子供の頃の我々の上に有った魅力は、今日この頃の百貨店の比ではなかった。

我々は何時間も勧工場で楽しい時を送った。

銀座に硝子の屋根をつけるとは、だから、大きい勧工場が欲しいといふことにもなるだろう。昔の勧工場は、光線をとる工夫も不十分で、暗く何處か陰気であったが、新時代のものは明るく、温かくなければならぬ。

川端康成氏の、浅草紅團の中に、

「……銀座は化粧で澤山だ。變装を必要とするほど陰の多い街ではない。……」とある。その通り、銀座は多くの暗い陰を必要としない。そこを歩む人は、健康で、明朗な心の持主ばかりなのであるから、新しい大勧工場は、採光に最も重きを置かねばならないであろう。

## ③ 池田弥三郎 (1914-1982 国文学, 慶大教授)

○ 新橋の角の「ちとせ」が「帝国博品館」に変わる<sup>43)</sup>

さう言えば昔の銀座に食べ物屋は極めて少ない。新橋の角のちとせ(後の博品館)、高橋の松田、汁粉屋なら若松と十二か月、三丁目の天虎、横丁へ曲っては天金があった。……「ちとせ」は、既に三十四年の、右の風俗画報では、「帝国博品館」に変わってしまった。博品館になったのは、明治三十二年十月のことであるが、その少し前のものらしい例の『明治銀虧帖』でみると、「支那御料理・千とせ」とあって、説明に「芸者遊びは横河岸の入口より」とある。新橋際のかどの店であった。

○ 今日の博品館劇場へ<sup>44)</sup>

銀座八丁目の、昔で言えば新橋を渡った左手の角は、今、普請中である。出来上るビル

43)「銀座十二章」朝日新聞社 昭和40年 224-225 ページ

44)「わが町銀座」サンケイ出版 昭和53年 232-234 ページ

42)「銀座」改造社 昭和15年 61ページ

は「博品館ビル」だが、その八、九、十階がミュージカル専門の小劇場「博品館劇場」になる、ということで、その紹介記事が、昭和五十二年十二月三日の各紙に、その完成予想図とともにでていた。昭和五十三年九月一日のオープンだという。これで、南からの銀座への入口が、いかにもふさわしい威容を誇るころになるだろうと思う。

わたしの記憶にあるこの角は、さかのぼれる限りのところに、勸工場の博品館がすでにあった。

勸工場ということばは、もう耳馴れないことばとなった。

明治十一年といえ、ちょうど今からまる百年の昔になるが、勸工場は、勸業場とも、また京阪地方では勸商場とも言ったという。

勸工場は、百貨店というよりも、今の各店街式のものに近い。そして「勸工」にふさわしく、新案の珍しい新商品の宣伝販売が目的だったようだ。新橋際の博品館は二階建てであったが、階段をのぼらずに、店々の前を通りすぎていく間に、次第にのぼり、また自然におりてくる、といったような具合だった。……

博品館の勸工場はいつまであったろうか。昭和五年の暮にはまだあったことが記されているが、昭和シングル時代のうちに消えたのではなかろうか。

博品館のあとは、いつか、カフェー、銀座パレスとなった。なんのことはない、明治時代の千とせが大正時代は伏流となって勸工場に席をゆずり、それが又昭和時代になって、装いを変えて、芸者ならぬ女給がサービスする店になって、顔を出したよう具合だった。

## ②④ 岸田劉生（1891－1929 画家）

### ○ 隣の勸工場に毎日の様に行った<sup>45)</sup>

私は明治二十四年に銀座の二丁目十一番地丁度今の服部時計店のところで生まれて鉄道馬車の鈴の音を聞きながら青年時代までそこで育って来た。

私の隣には、勸工場があつて私たち兄弟たちは毎日の様にそこへ行った。何でも私の家の家作であつて、南谷という人がやっていた。南谷は今以て人形町に店があるがきんちゃくが漆くいで入口に出来ていたので俗にきんちゃくの勸工場ともいっていた。勸工場も日露戦争後、デパートメント・ストアの流行とともにだんだんすたれて、今は殆んどなくなった様だが、当時は少し人出の多い盛り場には必ず一つや二つはあつたものだ。銀座だけでも一丁目のもとの読売新聞の一、二軒隣に丸十、そのすじの向いに丸吉、それから南谷、震災前まであつた菊屋のところに小さいのが一つ（これはじきなくなった）、尾張町の今の鳩居堂<sup>きょうどう</sup>のすじ向うあたりに一つ、一丁おいて又一つ、それから新橋際の博品館と六、七軒の勸工場があつたものである。

誠にこの勸工場というものは、明治時代の感じをあらわす一つ尤<sup>ゆう</sup>なるものであつて、私共にとっては忘れられない懐かしいものの一つである。細い一間半位の通路に両がわに玩具、絵草紙、文房具、はては筆筒、鏡台、漆器類、いろいろのものを売る店があつて品物をならべた「みせだな」の一角に畳一畳くらいの処に店番の人が小さな火鉢<sup>あひらか</sup>や行火<sup>ぎやうか</sup>をかゝえてちんまりと座<sup>じ</sup>つて、時分時にささやかな箱弁当でも食べていようという光景は、とても大正昭和の時代にふさわしくない。

夜の灯が電気に占有されたのは大正初めからだが、明治時代は一般に石油ランプ、それがおいしいガス燈になったものだが、銀座の勸工場は早くから電気燈がついていた。子供の時分、一丁目の丸吉の勸工場は早くから電気燈がついていた。子供の時分、一丁目の丸吉の勸工場へ夕方行つていて、不図天井を見た時、長い廊下の天井に一行についている電気がスーッと一どきについたのを大変美しく思い、それからよく夕方その電気のともるの

45)「大東京繁昌記」(下町篇) 講談社 昭和51年  
225－226ページ

を見に行ったものであった。宅の隣の勧工場には早くから、アーク燈がついていてその光の色を私は大へん好んだ。夏になると虫が沢山とんで来て、朝になると、カーボンが歩道の上に落ちていた。明治三十四、五年頃のことか隣の勧工場ではガス会社が宣伝のために出張して、美しいガス燈ランプや、ガス風呂、ガス釜など陳列していたが腕白な私がよくそこへ遊びに行きガス会社だからとて得意のガスを発砲してはふざけたものであった。

## ㊤ 鎬木清方 (1878-1972 画家)

### ○ 銀座の勧工場を下駄ばきであるく<sup>46)</sup>

銀ぶらというのは勿論<sup>もちろん</sup>近年の造語だけれどそこが都会人の夜の散歩街であったことはその頃でも変りはない。……

今では何一つ買わないでも、下駄穿きのままで自由に店の中を一巡することが出来るけれども、その時分土足<sup>どそく</sup>で入れる店などいうものは氷屋くらいのもので、それにまた、品物を出させて買わずに帰るのは、見え坊な江戸っ子の爲<sup>ため</sup>し能わざるところであったので、散歩はどこまでも散歩に過ぎず、飾窓さえろくにない銀座通をあっちこっちへぶらぶらすだけなのだが、この通りの中に二つ三つ勧工場<sup>かんこうば</sup>があって、ここへはいれば大びらに品物をひやかしてあるくことができた。……

勧工場は今でも上野博品館<sup>はくひんかん</sup>があるけれど、デパートのなかった時分には買物をするより、散歩の時間つぶしには至極調法な存在であった。

デパートでさえ近頃まで下足付け<sup>げそく</sup>していたのに、勧工場は初めからだ<sup>わか</sup>が、中途からだか解らないが、とにかく私が知ってからは何処<sup>どこ</sup>もみんな下駄穿きであるけた。板張<sup>いたばり</sup>の床や梯子<sup>はしご</sup>段<sup>だん</sup>をがら鳴らして通るので、両側の店の

間六尺ばかりしかない道なのだからその騒々しさといったらない。(昭和八年三月)

## ㊤ 篠田鉦造 (1871-1965 新聞記者)

### ○ 煉瓦通りの勧工場<sup>47)</sup>

新橋の北角(博品館)のところも勧工場でしたが、京橋の左側の㊤セトモノヤのところ<sup>㊤</sup>が、㊤勧工場<sup>㊤</sup>で広い方でした。右側にも一ヶ所あって、後に発明展覧会などになったのを覚えています。当今の百貨店へ行くように、銀座へ往けば、勧工場へ入るのが楽しみで、子供を連れて往くと、勧工場<sup>㊤</sup>で買物をするよりほかは、総体銀座の商品は高価のもの、上等品と目ざされていました。我々はなかなか出しが出来ない。だから勧工場物で満足して置く<sup>㊤</sup>で、ソノ勧工場物<sup>㊤</sup>というのは「安いかわりに悪い」と相場が極<sup>㊤</sup>っていても、安いから間に合して置こう<sup>㊤</sup>といった買い方<sup>㊤</sup>でした。

明治時代には、衣服や洋服は、安物を柳原<sup>はら</sup>とか、日陰町<sup>ひかげちょう</sup>とかいい、安い商品<sup>㊤</sup>は、勧工場物とされたものでした。「どうだ、コノ花瓶は」「ウム勧工場物か」とケナシたものです。洋服でも新調すると、「柳原かい」コノ柳原<sup>㊤</sup>ということは、私共山の手のものには、いっそ「日陰町かい」といわれた方が、適切に感じました。柳原も日陰町も、ともにツルシン坊で、既製品が吊り下げてあって、安いものでしたが、スグ間に逢うもので、便利でした。調宝<sup>㊤</sup>この上なしでしたよ。外套なんかは私共日陰町で好きなものを買って、その場から着られますから、古いものを下<sup>㊤</sup>に取って貰<sup>㊤</sup>って、たちまち新調を着て出懸<sup>㊤</sup>けられたものです。

ソノ勧工場と、日陰町柳原が、現今の百貨店<sup>ひゃくかてん</sup>にだんだん移って、捨銭均一・二十銭均一部<sup>㊤</sup>や、洋服部といった売場は、ソックリなんですから、便利調宝<sup>㊤</sup>という点は、万世不易

46)「随筆集 明治の東京」 岩波文庫 1989年 121-122ページ

47)「明治百話」(下) 岩波文庫 228-231ページ



で流行はあしたの風にいろいろ変って来る。今日百貨店で、既製品の洋服インパネスのツルシンボウを買ったところで怪しみもせず、ケナシもしませんが、昔は一段下がった。人によってはまさかに着られもせず、買われもしなかったものです。均一品にしても、段々安かろう悪かろうといった勸工場仕入れになるのを、大百貨店がやり出したのは、めぐる因果というのもおかしいが、めぐる流行とでもいいでしょうか。イヤ余計なお話になってしまった。

○ 板敷を踏鳴らす音<sup>48)</sup>

この勸工場気分を少しくお話しして置きたい。夢にも知らない人には、妙に聞えましようが、私共にはまた懐かしいとこもあります。まず勸工場は入口出口と区別されて、入口から入ったところには、洋品とか小間物とか、立派な店が、といっていずれも小間取りで一間とか二間がセイゼイで、その店の一つ々々に店の主人か、娘か、おかみさんか、小僧か手代がついていて、人がたかるとセったのもあれば、黙って店番しているのもあるが、小店で一人々々ついているから、店番だけでも大変な人数です。場内は狭くって、買物しているお尻とお尻がぶつかる程度でした。少し人だかりのする店前は通れなくなったもので、例えば、芸妓やお酌が、小間物屋で半襟を買っていられると、ソレを覗き込む人だかりで、人通りが止るといった塩梅<sup>しんばい</sup>でした。

マズ日用品は、一<sup>びん</sup>から六<sup>まり</sup>まであって、おもちゃ屋文房具店、呉服店が多かった。とにかく数百件の店を通らないと、出口へ到着しないといった通路をとってあって、二階があると、下駄が板敷を踏鳴らす音、ことに梯子<sup>はしこだん</sup>段を踏み鳴らす音がひどい。後にはズックを梯子段へ敷詰めたりしていたのもので、コノ板敷を下駄のままふみ鳴して歩くのが、いわゆる

勸工場気分でした。そして安くて悪くって、スグ壊れるなんかは、「勸工場の物だからね」と言って怪しまない。妙な特権を持っていたものですよ。百貨店の均一品も、追々そうした安くて悪いものになりゃアしませんかしら。勸工場は申すまでもない。正札つきでコノ点が正札で売り広めたものでした。出口のところは、台所道具が店を張っていた。といって何を買っても届けてくれませんかから、買った物は持って帰るといった不便がありました。当時コノ不便へ思い付く人はなかったもので買えばまず持って帰る覚悟をしていました。ソノ代り銀座の大商店の方は、商品が高価ゆえ、コレは届けてくれた。今の百貨店は、ソレを巧みに取りいれて、買ったものを届けるから、便利この上なく、発展してしまった訳でしょう。百貨店だった届けないとなったら買手<sup>かいて</sup>はありゃアしませんよ。

㊦ 平野威馬雄（1900— 詩人 評論家 小説家）

○ 銀座の勸工場<sup>49)</sup>

それから銀座二丁目に「内国諸物品、大販売所」の誠睦舎というのがありました。正札附で販売縦覧勝手次第ですから、勸工場式の売店で、明治十四年に開業、厘毛<sup>りん</sup>もまけず、正札通りお買上げの程を……と、唄っていますが、これよりさきに、銀座二丁目角に、第一商盛社というのが開業二年開祖第一と称えていますから、誠睦舎と競争していたものが、この商盛社は、第二が神田今川橋角、第三が新橋竹川町でさかんにやっていたものとおもわれます。

ところでこの勸工場については、小柳久之（銀一の小柳陶器店ご主人）さんが「今日では、勸工場は上野の広小路に一ヶ所あるだけ

48) 47)

49) 平野威馬雄、小松崎茂「懐かしの銀座・浅草」毎日新聞社 昭和52年 243-244ページ

のようだが……と」大正十年十月「銀座」誌中に語っています。……

㊸ 鹿島孝二 (1905-1986 小説家)

○ 広小路の勧工場<sup>50)</sup>

しかし広小路では子供たちに最も人気があったのは「勧工場」であろう。勧工場とはいかにも大正時代的な名称ではないか。何の工場か、と今の人に質問されそうだが、そんなものではない。産業を勧奨する<sup>いせし</sup>のが明治から大正へかけての為政者たちの合言葉みたなものであったので、その声に応じるかのようにこんな名称が出来上がったのだろうが、何のことはない。現在のデパートをうんと田舎っぽく、時代おくれ的に商品陳列売場と思えばよろしい。もちろん民営だった。

その勧工場なるものは、山下からずっと広小路交叉点寄りの右側に在った。洋風の外観であったけれど、何階建てであったか分からない。というわけは、入場して、客が歩くところには階段が無く、通路が爪先のぼりになって居り、両側に並ぶ店を眺めながら歩くうちに、いつの間にかかなりの高さに昇っていて、やがて下り加減になり、館内をぐるぐる廻って知らぬ間に出口に達し、広小路の大通りが眼の前に見えるという仕掛けだったから、三階だったか四階だったか、さっぱり分からないのである。

子供たちはここを何回も出たりはいったりした。入口からはいってぐるぐる廻って、出口に出るともう一度入口から入ってぐるぐる廻るという工合いである。たいして子供向きの商品が並んでいたわけではない。せいぜい玩具屋が二軒、絵本屋が一軒くらいで、あとは衣料品屋とか靴屋、下駄屋、小間物屋、といった店ばかりなのだが、館内をくるくる廻

るのがおもしろいのだった。

㊹ 加太こうじ (1918- 評論家)

○ 上野の「かんこぼ」<sup>51)</sup>

上野は、しばらく荒廃した感じだったが、明治十年に第一回内国勸業博覧会が不忍池畔で開催されて、それからは賑はいをとりもどした。この博覧会の売れ残りの品を一カ所にまとめて安売りをした。それを勧工場<sup>かんこうば</sup>といった。

小規模なデパートのようなものだったが、勧工場は太平洋戦争時まで博品館という名で広小路の松坂屋と相対する角の三軒目、すなわち岡埜菓子店の隣に残っていた。土地っ子は昭和になっても博品館とはいわず、勧工場とよんでいた。明治から大正にかけては、コウバ=工場、テイシャバ=停車場そのほかバ=場がつく名称が多かった。

㊺ 玉川一郎 (1905-1978 小説家)

○ 勧工場の思い出は古い石版画<sup>52)</sup>

勧工場 本郷三丁目から菊坂通りに下る在角にあった勧工場は明治の末迄たしかにあったのに、大正四年には燕楽軒というハイカラなレストラン（もちろんその頃は西洋料理店と言ったが）になっていた。

燕楽軒のことを語るまえに、勧工場の説明をしなければなるまい。

デパートの前身と言うか、スーパーの前身と言うか、昔は田舎によくあった「よろず屋」つまり雑貨屋を大きな建物の中に集めた、という形式の店が、勧工場であった。

戦前、戦災をうける少し前まで、上野広小路と、銀座八丁目の千疋屋の隣だかにあった

50)「大正の下谷っ子」青蛙房 昭和51年 35-38ページ

51)「写真集上野」京成電鉄 昭和51年

52)「大正・本郷の子」青蛙房 昭和52年 22-23ページ

と思う。

四ツ五ツの幼い眼に残っている本郷三丁目の勸工場は灰色の三階建てくらいの建物であった。なぜ三階建てくらいと言うかという、内部にはいると、階段は無く、両側に並んでいる店々には、火鉢なんかを抱え込んだ小父さんが店番をしていて、その店の前の飾棚などを覗きながら歩いていると、いつの間にか、二階、三階いってしまうからである。

通路が次第に登り加減に作ってあるのだ。

ガラス蓋のついた箱の中に、ゴムで作られた色とりどりの海鼠<sup>なまこ</sup>みたいなものを、これも小学校にまだ上らない従兄と手をつないで見ていたら、店の小父さんが、

「これ、これ、子供の見るもんじゃない」と、手を振った。

意地の悪い小父さんだと思ったが、これは後年、変型サックであるということを知った。（買ったり使ったりはしませんよ。右、念のため）

しかし、勸工場の思い出は、埃<sup>ほこ</sup>りにまみれた古い石版画みたいな気がする。

## XI おわりに

二十世紀初頭に勸工場は全盛期であったが、百貨店誕生もあり急速に衰退し、消え去った。今日、勸工場といっても殆んどの人がその名称すら知らないが、二十一世紀を迎えてこの歴史と明治文化への影響を研究したことに意義があったと思っている。

本研究のなかで資料を分析していく過程での感想を述べたい。

第一に、資料の誤り、孫引きがみられることである。執筆者の記憶違いが活字となり、それが他の資料に引用、地方公共団体の刊行物にも孫引きによって記載されているものもあった。

第二に、原資料にあることで、切り貼り、朱記記入されているものもあり、何が真実かは判断がむずかしいこともあった。

第三に、古文書のなかには墨汁で記載され

ていて判読できないものもあったので、本書では空白になっている箇所もある。

第四に、活字になっている資料に省略化されて全文が記入されていない事項もあった。

最後に、勸工場は現在殆んど忘れられているが、文学書などを読むと明治文化に大きな影響を与えていることが理解される。私は本稿を作成するに当たって多くの著作を読む機会を得た。

本研究は静岡産業大学の研究活動助成金を受けて行なわれた。

## 追 補

本稿作成中に詠んだ短歌

荷風からゾラとドレフュスへわが思い流れ  
ゆきて研究すすむ（日経歌壇 平成12年 5月  
14日 岡井隆選）

永井荷風の「野心」はエミール・ゾラの作品に影響を受けたこと、ゾラが当時ゾレフュス事件（ドイツのスパイとして有罪判決）に際し、抗議し自らも有罪判決を受けたこと、その後、ドレフュス、ゾラともに無罪となったが、1908年（明治41年）ゾラが炭酸ガス中毒死したあとに民衆が彼の柩に向って罵声を浴びせたということも歴史の事実である。

「河合教授無罪判決」と欄外に朱記せし『断腸亭日乗』を読む（日経歌壇 平成12年 10月29日 岡井隆選）

河合栄治郎博士（東大経済学部教授）は出版法違反で起訴され、一審無罪判決を受けたが二、三審有罪となった。自由主義者河合栄治郎と自由人永井荷風との接点を詠んだものである。

## 参考文献

- 1 警視庁「勸工場取締規則」
- 2 文部省「尋常小学読本 巻七」大正3年
- 3 勸工場の研究文献  
田中政治「明治のショッピングセンター勸工場考」 田中経営研究所 平成3年

- 初田亨「東京 都市の明治」 ちくま学芸文庫 1994年
- 初田亨「百貨店の誕生」三省堂選書 1993年
- 松田慎三「改訂デパートメントストア」日本評論社 昭和8年
- 仲田定之助「明治商売往来」青蛙房 昭和4年
- 吉見俊哉「博覧会の政治学」中公文庫 1992年
- 日本小売経営史編集委員会「日本小売経営史」公開経営指導協会 昭和42年
- 桑谷定逸「勸工場革新論／普通小売商人現在の地位」(彼等是如何なる危機に瀕みつゝある乎)「商業界」第八巻第一号
- 井關九郎「今の勸工場は何故に振はざるか」(改良すべき六大要件)
- 「実業之日本」十五巻十三号
- 4 商業論, 商業史など
- 鈴木安昭・田村正紀「商業論」有斐閣新書 1980年
- 菅野和太郎「日本商業史」日本評論社 昭和5年
- 宮本又次「日本商業史概論」世界思想社 昭和29年
- 宮本又次「日本商業史」龍吟社 昭和18年
- 坂本陶一「商業通論」同文館 明治39年
- 原田祐三「商業学通論」実業之日本社 大正3年
- 飯田旗郎「商業汎論」博文館 明治35年
- 石川文吾「商業十二講」清水書店 大正15年
- 石井研堂「明治事物起源」5 ちくま学芸文庫 1997年
- 石井研堂「進歩的経営法, 小売商店繁昌策」博文堂 明治42年
- 土屋長吉「店前裝飾術」実業之日本社 明治38年
- 増田大次郎「引札絵ビラ風俗史」青蛙房 昭和56年
- 5 年表など
- 岩波書店「近代日本総合年表」第三版 1991年
- 東洋経済新報社「政治経済大年表」 昭和46年
- 野田信夫「日本経営史年表」ダイヤモンド社 昭和56年
- 岡崎次郎他「日本資本主義発達史年表」河出書房 昭和24年
- 大濱徹也 吉原健一郎編著「江戸東京年表」小学館 1993年
- 中央区「中央区年表 明治文化篇」昭和41年
- 資生堂「資生堂百年史」昭和47年
- 6 地方公共機関など
- 東京百年史編集委員会「東京百年史」第二巻 第三巻 昭和47年
- 「東京府史」行政篇 第三巻 昭和10年
- 同 府會篇 第二巻
- 東京都「東京五百年」昭和31年
- 東京都「東京府志料」昭和34年
- 「麹町區史」昭和10年
- 「千代田區史」中巻 1960年
- 「京橋區史」下巻 昭和17年
- 「中央区史」中巻 昭和33年
- 「浅草區誌」下巻 大正3年
- 「港区史」下巻 昭和35年
- 「新修港区史」昭和54年
- 港区立三田図書館「明治の港区」 昭和41年
- 台東区教育委員会「古老がつづる台東区の明治・大正・昭和」1979年
- 大阪市役所編「明治大正大阪市史」(昭和8-10年) 第一, 三, 六, 八巻
- 大阪市役所商工課「大阪市に於ける勸商場」大阪市商工時報 第40号 大正10年12月